

# 消失する暗号としてのボロブドゥール

嶋田毅寛

「ボロブドゥール」とはインドネシアのジャワ島にある8世紀に建造されたと言われている大乘仏教の建築物である。『啓示に面しての哲学的信仰』（以下『啓示』）<sup>▼1</sup>においてヤスパースは暗号を超克する思惟の代表例としてドイツのキリスト教神秘主義思想家のエックハルトとともにそれを挙げている。今回ヤスパースのボロブドゥール論を取り上げる意義は仏陀や龍樹という「大哲学者たち」ではなく、仏教（Buddhismus）に対するヤスパースの見解ということである。本稿は三つの観点について取り上げてみる。第一は注と地の文の両方において名指しで取り上げられている仏教学者のハインリッヒ・ツィンマー（Heinrich Zimmer, 1890-1943）のボロブドゥール論にどれだけヤスパースが負っているか、第二はヤスパースが自らの『啓示』においてどのようにそれを捉え直しているか、第三は、仏教における悟りの境地である涅槃（Nirwana）に対するヤスパースの観点が自らのボロブドゥール論においてどう反映されているかである。

## 1. ヤスパースによるツィンマーのボロブドゥール論の受容

『啓示』において書名の挙げられているツィンマーの著作が『芸術形式とヨガ』（以下『芸術』）<sup>▼2</sup>である。そして実際にツィンマーの『芸術』に『啓示』を照らし合わせてみると、明らかにツィンマーの見解を受容したと思われる箇所が少なくとも五に上る。この事実は戦後のヤスパースの仏教論にツィンマーの見解が大きな影響を与えたことを示す。

ボロブドゥールの構造は基礎となる壇の上に五層からなる方形壇が乗り、さらにその上に三層の円形壇が乗る、合計九層から成り立っている。基礎壇より上の五層の内、第一から第四までの回廊の壁面にレリーフが彫りこまれている。そして第二回廊までは仏陀伝が中心であるのに対して、第三及び第四においては弥勒経及び普賢経に関する内容となる<sup>▼3</sup>。ヤスパース及びツィンマーともに、

この弥勒、普賢両菩薩のレリーフが彫られている第三、四壇を「形ある感覚の世界 (die formerfüllte Welt der Sinne) ではなく、形ある直観の水準 (die Ebenen formerfüllten Schauens)」<sup>▼4</sup>としている。これは四層までの回廊の後半以降が経典の内容中心となるため、もはやそれが仏陀の生涯のように感覚的に捉えられるものではなく、内的な視覚 (inneres Gesicht) のみ注視できる「直観の水準」という段階へと移行することであるという。

ポロブドゥールの第五層においてはもはや外壁のレリーフ装飾が消失しており、そして五層より上の円形三壇には網目状の籠目の覆いで仏像を蔵している七十二個の丸屋根が三つの同心円状に中心のドームの周囲に並んでいることについても、ヤスパース、ツィンマーともに類似した表現で記述している<sup>▼5</sup>。籠目の丸屋根がまだ内部を完全に覆い尽くすものではないことから、それらは「形なき直観の領域 (Reich formloser Schau)」<sup>▼6</sup>という「涅槃の前段階 (Vorhof des Nirwana)」<sup>▼7</sup>であり、そして中心のドームが内部を完全に閉ざしているものであるから、それは完全な空 (Leere) を象徴する青空へと上に向かって突き出ているのだということについても、ヤスパース、ツィンマーの見解に一致点が見られる。

ツィンマーは上昇の意味をこう理解する、巡礼者において内的な像の展開 (innere Bildentwicklung) は最初に発展の道 (Wege der Entfaltung) において、次にその発展したものの溶解 (Einschmelzung des Entfalteten) において遂行される。(『啓示』)<sup>▼8</sup>

執金剛神の立場へと高まって行く途上でシュリーチャクラシャンバラタントラは説いている、内的な像の展開の二つの方向における修養、いわゆる発展の道と発展したものの溶解において、見るものと見られたものとの間の区別とその区別による意識である自己と他者への緊張が消滅するという三昧の二つの段階へと導かれる。(『芸術』)<sup>▼9</sup>

ここで初めてツィンマーの名が直接あげられ、ポロブドゥールの回廊を上昇

していく意味が述べられている。「内的な像の展開」とは先に引用した「形ある感覚の世界」から「形ある直観の水準」という「発展の道」、そして遂にはレリーフが消失する「形なき直観の世界」という「発展したものの溶解」へと内面の変革することを示している。ヤスパース自身このような仏教的上昇について「独特な沈潜修行の瞑想、意識状態の転換を通して現れる」▼<sup>10</sup>と述べている。そしてここで出てくる〈溶解〉とは、ツィンマーのボロブドゥール論の表題にも含まれる語であり、その捉え方については次節において改めて触れる。

〔純粋な空を目標とする〕その道は意味と洞察の、豊かな生の快と不快に満ちた多様性の形の世界を通して、形なき直観の領域を越えて端緒なき涅槃(anfangsloses Nirwana)へと高まっていく。巡礼者は自らに対して固有の本質を覆い隠し、歩き回られたテラスとして後に残る無知の束縛(die Fesseln der Unwissenheit)が、〔巡礼という〕苦行の内では離れ落ちるのを見る。(『啓示』)▼<sup>11</sup>

ここ〔足と精神でもって純粋に釈迦牟尼の模倣をすること〕では人間の意識において自己と形ある世界に分けられている純粋空が自らの真の境地へと帰り、感覚の形の世界と形なき直観の領域への洞察を通じて自らの端緒なき涅槃へと上り詰め、自らにとって本来的な本質を覆い隠す無知の束縛を歩き回られたテラス同様に自らの足元に平伏している円形広場において脱し、そして色あせて名と形なき仏陀となり、あらゆる現象の本質である空となる。(『芸術』)▼<sup>12</sup>

ヤスパースとツィンマーの論とを照らし合わせてみると、巡礼者が五層の方形壇を自らの足でもって巡り上昇していくという苦行において釈迦の辿った道を追体験し、意識でもって自己と他と別れている多様な世界を下壇のテラスに置き去り、そして上段の方で完全にそのような束縛を脱した「形なき直観の世界」に達する。そして中心の丸屋根ドームの上方に青空が広がっており、それはもはや「形なき直観の世界」をも超え出た端も中心もない「端緒なき涅槃」であるという。

ここまでヤスパーズとツィンマーのボロブドゥール論を対比させてきたが、引用の箇所を見る限りヤスパーズはツィンマーの見解を忠実に受容している。しかしそれだけではツィンマーの模倣でしかない。ヤスパーズはボロブドゥールを「暗号を超克する思惟」の例としており、彼の哲学（的信仰）との関連でそれが語られなければならない。そのため次節においては既述した通りツィンマーの言う〈溶解〉の受け取り方とも関連させてヤスパーズのボロブドゥール論を考察してみる。

## 2. 暗号の消失と溶解

これまでの両者のボロブドゥールの見解により、

形ある感覚の世界	→	形ある直観の水準	→	形なき直観の領域	→	涅槃
最下壇		第三壇		第五壇		そら 空
第一壇		第四壇		円状テラス		
第二壇				一～三壇		

というツィンマーの図式を基本的にヤスパーズも受け入れていることがわかる。しかし彼のボロブドゥール論の冒頭は「あらゆる暗号を超える仏教的思惟」である。それでボロブドゥールのレリーフ及び仏像、そしてそれを蔵する丸屋根は、仏教的思惟にとって乗り越えられるべき暗号（Chiffer）であるとヤスパーズに捉えられている。先に引用した「内的な像の展開は最初に発展の道において、次にその発展したものの溶解において遂行される」というツィンマーの着想と思われる一節に続いて、「暗号の展開はあらゆる暗号の超出を伴う」<sup>13</sup>、「暗号として仏陀〔像〕自身は消失しなければならない」<sup>14</sup>とある。このことからして、ヤスパーズは〈溶解〉を越えること、そして越えられたものは消失すると捉えていると考えられる。というのもここでは前節においても触れた、まづレリーフのある回廊ではくぼみの内に安置されている仏陀像が目につえられているが、上壇では籠目の丸屋根の内で仏陀像が目に対して遠ざけられているものが見られ、そして最上壇のドームではそれが完全に目からは消失する

過程について述べられているからである。ヤスパースのボロブドゥール論においては、その全体が暗号であり、巡礼者が最下壇から上昇していくごとに内的な変革を起こしつつ、形ある世界、感覚的なものを超出していき、最終的にそれら全てが乗り越えられて涅槃へと到達することが、「あらゆる暗号を超える仏教的思惟」であると見て取れる。

ヤスパースにとって「あらゆる実在性だけでなく暗号も越えて、我々を支えそして包括者の包括者であるものの思惟不可能性と言表不可能性へと超越する試み」<sup>▼15</sup>という、暗号をも乗り越えていく試みは、彼の『哲学的信仰』にその片鱗をうかがうことができる。

客観的なものは運動のうちにとどまり、いわば蒸発しなければならない。そうして消失する対象性の中に端的にその消失を通じてある充足した存在意識が明白になる。したがって哲学的信仰はいつでも溶解し (einschmelzen) 廃棄する弁証法のうち立っている。<sup>▼16</sup>

ここにおいて充足した存在意識を明白にさせるために客観物の消失することが述べられており、この消失することの文脈において〈溶解〉の語られていることが注目し得る。先の『啓示』と照らし合わせてみると、「あらゆる実在性だけでなく暗号」も越えて、「そうして消失する対象性の中に」、「包括者の包括者であるものの思惟不可能性と言表不可能性」という「その消失を通じてある充足した存在意識が明白になる」という、その過程が「溶解し廃棄する」ことと見られる。ヤスパースのボロブドゥール論に当てはめてみるなら、ボロブドゥールは暗号として消失（溶解）すべきものを象徴していると言える、まさに「あらゆる暗号の彼岸についての思惟」<sup>▼17</sup>である。このように〈溶解〉とは「包括者の包括者」に対する充足した存在意識を明白にさせるために客観物を消失させていくという哲学的信仰の方法論であると見られる。しかも暗号を消失させて「包括者の包括者」を開明する具体例として「ボロブドゥール」が挙げられているので、「包括者の包括者」の開明のための暗号の消失と、暗号を超出する仏教的思惟というこの二つを同じ文脈で筆者は捉えている。した

がってツィンマーの言う〈溶解〉を、ヤスパースが『哲学的信仰』において述べた〈溶解〉の意味で『啓示』において解釈していると筆者は受け取る。

しかしここである問題点が生じてくる。それは〈溶解〉という語そのものの解釈に関することである。もともとツィンマーの『芸術』のなかで論じられているボロブドゥール論の表題は「ボロブドゥール——溶解の動性を持つマンダラ (Der Boro Budur: ein Mandala mit Dynamik der Einschmelzung)」である。先に引用した「内的な像の展開の二つの方向における修養、いわゆる発展の道と発展したものの溶解において、見るものと見られたものとの間の区別とその区別による意識である自己と他者への緊張が消滅するという三昧の二つの段階へと導かれる」において「発展したものの溶解」とは「自己と他者への緊張の消滅」と読み取れる。「溶ける」という動詞schmelzenと比べてeinschmelzenは単に「溶ける」という意味だけではなく「铸込まれる」との意味合いもある。そしてツィンマーのボロブドゥール論のうち、以下のような文が見出される。

大慈大悲の具現化である普賢菩薩 (Samantabhadra) はしたがって涅槃である悟りへの最も高貴な道先案内人である。あらゆる未来仏の原型 (菩薩) として普賢菩薩自身が菩薩であり、最高の菩薩性の理想的な具現化として彼は純粹直観 (dhyâna 禅定) の世界に禅定菩薩 (Dhyâni-Bodhisattva) として生きる。世界において普賢菩薩は形に満ちた感覚の世界から涅槃の玄関である形なき内的洞察の世界への通路を表している。▼<sup>18</sup>

ボロブドゥールの浮き彫り装飾は弥勒、普賢両菩薩に対して奉納されており、それは第三、第四回廊のレリーフがそれぞれの経典を示していることからもうかがえる。特に最後の第四回廊が普賢経を示していることから、上記のように普賢菩薩こそが涅槃への最高の案内人だというのである。そして普賢菩薩は「最高の菩薩性の理想的な具現化として」、「純粹直観の世界に禅定菩薩として生きる」との表現が注目に値する。「禅定」とは仏教において心静かに瞑想し、一切の区別が排されている真理を観察することであり、そこでは心身ともに動揺することなく安定した状態である。そしてツィンマーは禅定と直観を同義に

捉えている。さらに普賢菩薩を禅定菩薩とも述べており、「形ある直観の水準」から「形なき直観の領域」へと導く「大慈大悲の具現化」であるという。ツィンマーが普賢菩薩を禅定菩薩としていること、直観と禅定を同義に捉えていること、ボロブドゥールの第三壇以上を直観の水準・領域であるとし、そこでは見るものと見られたもの、自己と他との緊張が消滅し、それが「発展したものの溶解」とされていること、これらを踏まえると、ツィンマーの言うところの *Einschmelzung* は単に溶けてなくなるのではなく、溶かされたものが一つに鑄込まれて区別なき状態となる「禅定」のようにも見られる。

このようなツィンマーの見解に対して、ヤスパースが彼の解釈を意図的に避けようとしていたともとれる一文が『啓示』において見られる。

ツィンマーの解釈は彼にとってインドの仏教經典に基づいてのみ可能である。しかしこれら經典は我々に、像の無限な特殊性でも、個々のテラスや階段や入口の意味の点でも、情報を与えることができない。▼<sup>19</sup>

この引用を文字通り捉えるのであれば、ツィンマーはインドの仏教經典に基づいてボロブドゥールを解釈しているというが、実際に經典においてボロブドゥール内の個々のものの意味は得られないというのである。ヤスパース自身が『啓示』のボロブドゥール論においてツィンマーの『芸術』とは別に仏教經典を実際に参考にしてきたのかどうかについては触れられていない。しかしこの一文をもって、ボロブドゥールそのものについての解釈にヤスパースが全面的に賛同していたわけではないと見ることは可能である。それで第三章においては〈哲学的信仰〉という立場からの仏教の最高の境地である〈涅槃〉の捉え方が、ヤスパースのボロブドゥール論においてどのように反映しているかについて論じてみる。

### 3. 哲学的信仰における涅槃——そこから見えてくるボロブドゥール論

ヤスパースは『啓示』において、涅槃をキリスト教における啓示(*Offenbarung*)との対比において論じている。その両者においては「そこにおいて我々が自ら

を見出す包括者 (das Umgreifende) の確証」<sup>▼20</sup>が突破されるという点で共通点があるという。その一方で啓示と涅槃の違いは有体性 (Leibhaftigkeit) の有無であるとの意見がある<sup>▼21</sup>。それによると前者は超越的な存在の顕現として有体性をもって世界の内にあるので受肉によって有体的となった啓示は暗号であるのにとどまらないのに対して、後者は「包括者のあらゆる様態を、本来的ではなく、遊戯、魔術、幻影<sup>マヤ</sup>の覆いであるような何ものかにしてしまう」<sup>▼22</sup>のであり、世界から見れば涅槃は無のような単調のものである。そこでこのような涅槃の捉え方から、先の「あらゆる実在性だけでなく暗号も越えて、我々を支えそして包括者の包括者であるものの思惟不可能性と言表不可能性へと超越する試み」というヤスパーズのボロブドゥール論が現れると論じてみる。

すでに見た通りヤスパーズはツィンマーの言う〈溶解〉を消失することと捉えている。上壇へと上昇していくと消失するレリーフ、籠目丸屋根の内に閉ざされ視覚から遠ざかり始める仏陀像、完全に視覚に対して内部を閉ざした中心のドーム、これら全てはヤスパーズの言う暗号を超出する仏教的思惟の一環である。ヤスパーズから見れば、巡礼者たちはボロブドゥールを上昇していくことでこれらの暗号を脱して最終的に最上壇で初めも終わりもない「端緒なき涅槃」へと向かうというのである。彼らは「自らに対して固有の本質を覆い隠し、歩き回られたテラスとして後に残る無知の束縛が、苦行の内でも離れ落ちるのを見る」のである。つまり巡礼で壇を上昇していくことが束縛を脱することであり、それを暗号の消失が象徴しているということになる。先に見た通り、ヤスパーズにとって涅槃とは世界の内の対象的なものを脱することであり、対象的なものは「消失する暗号」として〈溶解〉するいう意義を持つものであるということ、このボロブドゥール論の内に見ることも可能である。しかし〈溶解〉の解釈については、それを単に「消失すること」と捉えることに問題があることは既に見た通りである。いわばヤスパーズはツィンマーのボロブドゥール論のうち、その構造や巡礼の仕方など外面的、形式的な面は直接受容し、レリーフや丸屋根などについては、壇を上昇していくごとにそれらの消失していく過程を、自らの言う意味での〈溶解〉であると捉え直していると言える。

このような涅槃の捉え方は、涅槃を体現化した仏陀を崇拝する宗教的信仰としての仏教ではなく、人間仏陀により示された涅槃という哲学的な捉え方ではないかとの疑念がある。

しかし、宗教としてのインド的なものは、涅槃に到達した仏陀を崇拝するという点において、つまり、いわば涅槃の受肉という有体化において、存立しているのではなかろうか。ヤスパーズは哲学として涅槃を捉えているのであって、宗教的信仰として捉えていないのではなかろうか。<sup>▼23</sup>

仏教は仏陀という人格に涅槃が受肉（体現化）することで成立しているとも考えられ、ボロブドゥールは「三世十方の諸仏に帰依する」<sup>▼24</sup> 大乘仏教の代表的建築物である。仏教も上座部、大乘、さらには大乘の中でも浄土、禅、密教などに分かれ、必ずしも一くくりにはできないものの、「仏教を構成する主要な要素を総括的にとらえる方法としては、仏と法と僧との三宝にまとめて考えることができる」<sup>▼25</sup>。そしてこの特に最初に来る〈仏〉について、本来歴史的な人物としての釈尊を意味していた仏陀は、「滅後になると次第に超人間的な仏陀を考え、大乘仏教になると三世十方の諸仏を考えるようになった」<sup>▼26</sup>とあるように、涅槃に到達した仏陀から涅槃を体現化した超人間的な仏陀へと仏陀観が変遷し、さらには菩薩信仰やヒンドゥーの神々をも仏教守護神として取り入れることで大乘仏教が成立するというのである。ツィンマーのボロブドゥール論の表題が「ボロブドゥール——溶解の動性を持つマンダラ」であり、マンダラとして三世十方の諸仏が配置され、その中でも普賢菩薩が涅槃への最高の道先案内人であるとの記述が、この意味での大乘仏教建築としてのボロブドゥールを物語っている。一方それとは対照的にヤスパーズは自らのボロブドゥール論において、ツィンマーのそれには見られたマンダラ、執金剛神、普賢菩薩等の仏教的用語について一切言及していない。そして『啓示』における「世界からみると涅槃は無のように完全に単調に思われる」、「思惟できぬもの、言表できぬものへと超え出る試み」という記述に近い表現として、『大哲学者たち』の「仏陀」の章において既に、「仏陀が涅槃について語るとき、涅槃は

ある一つの存在かであれば無になってしまう」<sup>▼27</sup>、「人が涅槃について語られたことの意味を感得しようとするのであれば、論理的な思惟では考えられないこのようなパラドックスがその人に当面しなければならない」<sup>▼28</sup>ということが見られる。このように見ていくとヤスパースの言う涅槃は「大乘仏教」におけるそれではなく、彼自身が語っている「大哲学者仏陀」により説かれたそれではないだろうかとの思いを筆者は強くするのである。『啓示』以前に『大哲学者たち』が執筆されているので、ある意味当然である。啓示と涅槃との比較の最後で言われる「涅槃は自己自身にとってのあらゆる有体性を廃棄する。その涅槃への道は暗号だけを知っている」<sup>▼29</sup>との一文が、ヤスパースの涅槃観のまさに要点である。涅槃への途上には暗号があり、それは涅槃にとって廃棄されなければならない、ボロブドゥールはその実例というのである。

筆者の意図としてはヤスパースが仏教における涅槃をどう捉え、そしてその涅槃観からボロブドゥール論が結実したと示すことにあり、もとよりヤスパースの仏教理解の問題点を指摘することではない。仏教専門でない身としてそのようなことは自身の力量を超えた試みである。だから筆者としては仏教学者の大乘仏教、涅槃、ボロブドゥール等に関する意見を参考にしつつ、ヤスパースのボロブドゥール論はそれらとは一線を画して彼独特の「哲学的信仰」、「仏陀論」、「涅槃観」から結実したものであることを示すために本稿を執筆したのである。その意味で仏陀の説いた涅槃をそのまま（大乘）仏教で説かれる涅槃としているところに、ヤスパースの『啓示』におけるボロブドゥール論の仏教観が見られると筆者は捉えている。このことはツィンマーのボロブドゥール論を受容する際の〈溶解〉の解釈もさることながら、先にも述べたように『芸術』においてツィンマーが言及している仏教の用語にヤスパースがほとんど触れていないことからもうかがえる。特にツィンマーのボロブドゥール論の表題にある〈マンダラ〉にヤスパースは触れていない。例えば真言密教において「大日如来と諸仏、諸菩薩との関係を説明して『大日如来は普門総徳の仏身であり、諸仏・諸菩薩は一門別徳の仏身である』として、これを図式的に描いたもの」<sup>▼30</sup>が胎蔵・金剛両マンダラであるという。それにおいてはたとえ位置的に周辺や下壇にあるものだからといって消失すべきものではない。なぜなら全ては大日

如来の現れとする汎神論的な世界観の図式化がマンダラであり、もとより全てに差別のないものだからである。

その建築〔ボロブドゥール〕の厳密に幾何学的な図式〔そこにおいては土台としての外部の四角形が内部の輪を取り囲みそして支えている〕は、内的過程とその過程において経験される空間を与え、意味に満ちた秩序づけの内で相並んで広がっている、偉大な本質の表現の彫像的象徴を創出したように見える。▼<sup>31</sup>

この引用においても分かるとおり、*ボロブドゥールをマンダラとみるツィンマー*にとってそれは単に消失していくことで涅槃を示す象徴的なものではなく、各部所がそれぞれ精神・内的段階を表わし、全体として精神的発展の動因となるものである。ヤスパースがこうした見解を取らず、〈溶解〉を哲学的信仰の方法論である「消失すること」として捉え、仏陀が説いた涅槃をそのまま仏教における涅槃であると解し、そのような涅槃観からボロブドゥール論ができたというのが、彼の『啓示』における仏教論であると筆者はまとめる。

\*サンスクリット語の表記及び仏教用語の意味は『仏教辞典』（中村元・福永光司・田村芳郎・今野達編、岩波書店、1989年）に拠った。

## 註

- ▼1 Karl Jaspers, *Der philosophische Glaube angesichts der Offenbarung*, Piper, München, 1962.
- ▼2 Heinrich Zimmer, *Kunstform und Yoga im indischen Kultbild*, Berlin, 1926.
- ▼3 井尻進『ボロブドゥール』中公文庫、1989年、137–138頁参照。
- ▼4 Jaspers, *ibid.*, S. 400; Zimmer, *ibid.*, S. 143.
- ▼5 Jaspers, *ibid.*; Zimmer, *ibid.*, S. 145.
- ▼6 Jaspers, *ibid.*; Zimmer, *ibid.*
- ▼7 Jaspers, *ibid.*; Zimmer, *ibid.*
- ▼8 Jaspers, *ibid.*, S. 401. (傍点筆者)

- ▼9 Zimmer, *ibid.*, S. 143f. (傍点筆者)
- ▼10 Jaspers, *ibid.*, S. 402.
- ▼11 *Ibid.*, S. 401. (傍点筆者)
- ▼12 Zimmer, *ibid.*, S. 146. (傍点筆者)
- ▼13 Jaspers, *ibid.*, S. 401.
- ▼14 *Ibid.*
- ▼15 *Ibid.*, S. 399.
- ▼16 Karl Jaspers, *Der Philosophische Glaube*, Artemis / Piper, 1948, S. 23.
- ▼17 *Der philosophische Glaube angesichts der Offenbarung*, S. 498.
- ▼18 Zimmer, *ibid.*, S. 144.
- ▼19 Jaspers, *ibid.*, S. 402.
- ▼20 *Ibid.*, S. 165.
- ▼21 『啓示』における啓示と涅槃との対比について、宮野升宏は「涅槃は一切の有体性を止揚して、結局『涅槃へ至る道は暗号を識るだけである』ということになる」、「啓示はまさに与えられたものであって、初めから有体的なのである」（峰島旭雄編『ヤスパース——哲学的信仰の哲学』以文社、1978年、113–114頁）と述べている。
- ▼22 Jaspers, *ibid.*, S. 166.
- ▼23 峰島編前掲書、114頁。
- ▼24 川崎信定『仏教概論』平文社、2008年、12頁。
- ▼25 前掲書、1頁。
- ▼26 前掲書、3頁。
- ▼27 Karl Jaspers, *Die großen Philosophen*, München, 1957, S. 139.
- ▼28 *ibid.*
- ▼29 *Der philosophische Glaube angesichts der Offenbarung*, S. 166.
- ▼30 前掲書、15頁。
- ▼31 Zimmer, *ibid.*, S. 139.

(大正大学総合佛教研究所研究員)

キーワード ボロブドゥール Borobudur 仏教 Buddhism 涅槃 Nirvana 溶解 dissolution 暗号 cypher